



私事で恐縮だが、私は両親が病気になってはじめて、公共図書館の医学関係の情報が貧弱すぎることを身をもって体験した。医学関係の図書は高価であるし、あまりに専門的であるため、公共図書館は、一般的な、やさしく説明した本を用意しておけばよいのだろうと、それまで思っていた。しかし、それでは、まったく、不十分であることがわかった。ついでに言えば、やさしく説明した本は、内容も大同小異であり、いろいろなホームページで説明してあることの域を出ないものが多い。治療法や手術にどんな選択肢があり、どのように行われるか、リスクは何なのか、また、使われる薬の具体的な選択肢やそのメリット・デメリット（副作用）は何なのかということがはっきり書かれていないものが案外、多いのである。結局、神保町の大書店の医学書コーナーで立ち読みというには大きな本を読むことになったが、

そこに、どうみても、同じような状況になっていると思われる人が群がるように来ているのを見て、愕然とした。公共図書館って本当に役に立っていなかったんだな、利用者のことを馬鹿にしすぎていたな（やさしい本じゃないと読んでもわからないだろうと）と感じたのである。命や金にかかわること（病気やビジネス）になると、普段、怠惰な私のような人間でさえ、がぜん勉強しだすのである。実際、今までだったら見向きもしなかったような医学書を読んだりした。神保町で見た本は数万もする本だったので、さすがに買わなかったが、1万円くらいまでなら、購入した本もあった。ところが、公共図書館にある本は1万円どころか5千円の本さえない。2千円前後で内容が似通った本ばかりなのである。

今、インフォームド・コンセントということで、医者は懇切丁寧に説明してくれる。模型を使ってまで説明してくれる。しかし、これらのことは本を読めばわかるような話も多く、その先のもっとも核心的なところを十分話しあえなくなることもあるのだ。ともすれば、インフォームド・コンセントの名のもとに、説明はして、承認も得たよという防衛医療が行われるとも限らない。これもまた、患者やその家族は、そんなに難しいこと言たってわからないという、ちょっと舐めたような感覚がある。大学卒業が当たり前のように

多くなってきた今、すでにそのような状態ではない。年老いた親自身はそんなにわからなくても、子どもは違うのである。よりよりインフォームド・コンセントやEBMが行われるためには、患者やその家族自身が勉強する必要がある。病気を治す、あるいは、少しでも事態を好転させるためには勉強が必要なのだ。そのためには、身近な公共図書館がまず、医療や健康に関する、「肝心なことが書いてある」情報・資料を「高価でもある程度」そろえてほしい。その上で、今、動きはじめた病院の患者やその家族向けの図書館サービスが普及することを切に願う。大学図書館も一般への公開も進んでいるとは言うが、医学関係はどうも、現実には利用の敷居が高い。

このテーマは、スローガンでなくて、館種をこえたサービス体系ができあがっていないと、最終的には無理だと思う。しかし、そういった課題にも応えていかないと、これからの図書館はただ厳しいだけだろう。だいいち、切にその情報を欲している潜在的な利用者から役に立たないと思われてしまう。流行ではなく、本当に医療や健康に関する情報の提供について読者の皆様に考えて欲しいと思い、この特集を組んだ。ぜひ、館種をこえた様々な方にお読みいただき、ご意見をいただきたいと思えます。

(山重壮一)